

国と自治体は雇用と生活の確保をはかれ！

年末年始

再び「派遣村」を必要としない支援体制を



大阪労連がハローワーク前で宣伝・対話

解雇などで職を失い、このままでは雇用保険の支給が切れた状態で年末年始を迎える人が、政府の推計で23万人にのぼります。再び「派遣村」を必要としない支援体制を国と自治体が責任をもって取る必要があります。政府は、ハローワークで、職探しと住居確保・生活保護相談ができる「ワンストップサービス」を試行し、年末年始の支援策を検討しています。大阪自治労連は、国と自治体が責任を持って雇用と住居を確保するよう要請しています。



大阪労連、自治労連がハローワーク前での宣伝・対話アンケート。「仕事が見つからない」「ワンストップサービスがあるなんて、知らなかった」という声が寄せられています。(11月30日)

前列左から3人目が委員長の原さん、後列左から2人目が羽曳野市職労の東委員長



図書館の仕事が好き！

初めての団体交渉は「楽しかった！」

「安心して働き続けられる職場をつくりたい」と思い、組合を結成しました」と語る委員長原知華さん。「結婚や出産といった人生の節目を、図書館で働きながら乗り越え、まもなく10年を迎えますが、この先も働き続けられるか不安がいっぱいでした」と言います。

羽曳野市内の図書館には正規職員9人(再任用含む)に対して、30人を超える非正規職員が働いています。ほとんどが図書館司書の資格を持ち、正規職員と同様に仕事をしていきますが、賃金や労働条件には大きな格差があります。雇用は1年契約の更新が繰り返されていますが「10年枠」という有期雇用で、いつまで働き続けられるのか不安におびえながら仕事をしてい

だから、働き続けたい

羽曳野市図書館非正規職員の仲間が労働組合を結成



羽曳野市立中央図書館

「労働組合は、闘ってナンボのところや」労働組合との出会いは、今年5月に大阪自治労連が開いた懇談会「図書館司書のしゃべり場」に2人の仲間が参加をしたことから。「不満や要求があつたら、羽曳野市職労の委員長に相談したらいい」とアドバイスを受け、迷いながらも市職労の東委員長に電話をかけて、話し合いが始ま

ります。今年度の賃金交渉では初めて団体交渉に参加して、当局に思いをぶつけました。「職場でぶつぶつ言ってるだけじゃなく、やっとな偉いさんの顔を見て、言いたいです！」と感想を語ります。

つくりたくても、労基署に訴えればすぐに解決するのは？」「組合費を払って、面倒なことをして、どれだけの見返りはあるのか？」など率直な疑問も東委員長にぶつけました。東委員長は一つ一つていねいに答え、「労働組合をつくって闘わない限り、要求は前進するところから後退する」「労働組合は闘ってナンボのところや」と激励。結局のところ「労働組合しかない」と腹をくくったのが結成の原動力になりました。11月4日に教育委員会に組合結成の通知と要求書を提出。「私は来年度働いて10年目を迎えます。組合を結成したのは当局に衝突するためではありません。この職場で働き続けたい、こんな思いでつくったのです。私たちを教育委員会も応援してください！」声をつもらせながら切々と訴える副委員長の言葉に当局も頷いていました。「勤務時間や休みがバラバラで、みんなが集まるだけでも大変。でも少しずつ仲間を広げてがんばりたいです」と原委員長は決意を語ります。